

県中教研 美術部会だより

第 40 号

発行日 令和7年3月
発行所 富山市千歳町1-5-1
富山県中学校教育研究会
編集責任者 石黒 均
題 字 金山 泰仁 先生

美術を通した豊かな関わり

指導主事 大懸 謙一

「美術って、何のために学ぶの?」と、生徒から聞かれたとき、皆さんは何と答えますか?これは、以前、私が授業をしていたときに、不意に生徒にされた質問です。当時、生徒が納得できる答えを返せず、今でも反芻する問いかけです。

美術科の目標には、「造形的な見方・考え方を働かせ、生活や社会の中の美術文化と豊かに関わる資質・能力」の育成が掲げられています。また、中学校学習指導要領（平成29年告示）解説美術編には、美術科特有の造形的な見方・考え方について、「感性や、想像力を働かせ、対象や事象を造形的な視点で捉え、自分としての意味や価値をつくりだすこと」とあります。この造形的な視点の理解は、生徒が生活や社会の中の美術の働きや美しさ等に気付くきっかけとなります。そして、それは、学習や経験を通して更新し続け、生涯にわたって生活や社会の中の美術や美術文化と豊かに関わる大きな力を育みます。つまり、美術を学ぶ理由は、生活や社会の中の美術と出会い、豊かに関わり続ける力を育てるところにあります。

東部地区大会の授業で、生徒の素敵な姿に出会いました。地域の魅力を伝えるパッケージのデザインを真剣に考える姿です。生徒一人一人が主題と願いをもって制作する中で、学習が生活の中の美術とつながり、学びを深めていました。そして、制作を通して、生徒たちは、美術を学ぶ楽しさや意義を実感しているように思えました。このような生徒の意欲的な姿が見られたのは、生徒の実態や願いを生かした学習課題と、生活の中の美術と生徒を関わらせ、表現を試行錯誤させるための教師の手立てがあったからだと思います。

来年度は、研究の3年計画の初年度となります。豊かな関わりを通して、美術を学ぶ楽しさや意義を実感できる生徒が増えることを願っています。

(東部教育事務所)

これまでのICT活用を振り返って

部長 石黒 均

学習端末が生徒にとってとても身近な道具になりました。令和6年度の両地区の研究大会でも、授業の中で情報収集、制作、意見交換、振り返り（ポートフォリオ）といった様々な生徒の活用場面があり、多くの生徒が必要に応じて端末を利用する姿が見られました。研究大会の参加者各々のICT活用について聞くこともでき、今後取り組んでみたい事例にも触れることができました。一方、今年度の郡市部長研修会では美術科として、制作活動やそれにとまなう指導方法の研究等、アナログも疎かにすることはできないとデジタルの研究に傾倒することを危惧する意見もあり、ICTの最適な利用については、今後より一層の研鑽が必要とされます。

さて、最近の私自身の授業でのことです。今まさにマッピングをしてキーワードを拾い集め、主題を決定し、どう表現するか悩んでいる生徒と対話をしているところでした。自己課題と向き合う大切な時間です。その時、別の生徒が視界の遠くで勢いよく学習端末に向かいだしました。私の胸のザワザワは的中しました。声をかけようと近寄ったとき、生徒の端末画面上にはAIが作品の構想を数点提案していました。生徒は今生み出したばかりの主題やキーワードを画像生成AIに入力していたのでした。これがAIとはっきり分かるものと私との初めての対峙になりました。（身近には、意識すらさせないAIがさらに潜んでいそうですが）AIの活用に疎い自分を反省した一方、「なにか、ちがうんだよなあ」と、AIの導き出した構想につぶやく生徒にほっと胸をなでおろす私。今後ますますAIの精度が高まり、生徒の制作活動の面白さや楽しみを奪ってはしまわないかと、不安に感じた一場面でした。

(高・高岡西部中)

第68回中学校教育課程研究大会美術部会

東 部 地 区 富山市立上滝中学校

越坂亜美教諭による「パッケージで地域の魅力を発信しよう！」の授業は、富山県の特徴や特産品の魅力やイメージを商品化し、そのパッケージのデザインを企画するという題材である。当日の授業では、ICTを用いた振り返りをいかに作品制作に生かすか考えられていた。発想段階では、学習端末で情報共有することで、一人では思い付かないようなアイデアまで広げることができた。また制作途中の作品や試作、アイデアスケッチ等を学習端末のカメラ機能を用いて写真データを保存し、ページに貼り付け振り返ることで、生徒はこれまでの試行錯誤の過程を確認できていた。より細かく自分の学びを分析、検証し、新たな発想や構想、技能の高まりや改善点に気づき、自分の学習成果を実感できた授業であった。



部会協議①で大懸謙一指導主事（東部教育事務所）からは、「ICTを使った発表や意見交換を通して、生徒同士が対話的に学び、自分の考えを深め、広げていた。特に、作品への思いを共有してコメントをやり取りすることで、多様な視点を獲得、自己調整しながら制作を進めることができていた」と評価をいただいた。

部会協議②で東京家政大学家政学部教授岡田京子先生からは、「ループリックを共有することで、具体的な評価規準を理解したうえで、生徒自身が自己調整しながら課題と向き合い、学びを高めることができていたと考える。ループリックの内容については、生徒の制作の実態を鑑みながら随時検討していくとよい」と助言をいただいた。

今回の研究大会では、越坂亜美教諭の様々な手法が取り入れられた授業を参観し、会員一同新しい指導方法を学ぶことができた。

小島 龍一（富・藤ノ木中）

西 部 地 区 高岡市立芳野中学校

西岡瑠衣教諭による「自分を表す花—モダンテクニックを用いて—」の授業は、様々なモダンテクニックで制作した紙を切り貼りし、自分を表す花を制作する中で、自分らしさを基に構想を練ったり、意図に応じて工夫したりする表現の題材であった。構想をOneNote上に記録していくことで、生徒が



主題を明確にしながらか制作を進めるなど、美術科の特質を踏まえたICTの効果的な活用がみられた。また、毎時間の振り返りや取組状況をポートフォリオとして記録に残すことで、見通しをもつことができた。本時の相互鑑賞では、ポートフォリオを共有して意見交換を行い、作者の表現意図に気付いて見方や感じ方を広げ、次時への制作意欲を高める様子が見られた。江田希指導主事（西部教育事務所）からは、「授業の導入部分で生徒同士の対話的な学びの場があり、グループ活動では表現と鑑賞が一体化するよう工夫されていた」「主題をもつためには、言語化や対話を通じて生徒が自分のイメージを具現化し、どのように表現するかを考えさせる活動が必要である」など、助言をいただいた。

部会協議②では、ICTを活用した評価の在り方について事例研修会を行い、各校の活用例や成果と課題を共有した。江田希指導主事からは、「評価の目的には授業改善があり、PDCAサイクルの実践をして指導と評価を一体化させることが大切」「ICTを使用する際は適切なルールとマナーを指導し、ICTを活用した表現や鑑賞と、実物を通じた体験の双方をバランスよく組み合わせ、創造性を育むことが重要である」など、助言をいただいた。

川路 聡美（高・志貴野中）